様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００２９１

研究課題名（和文）日本近代文学と口絵・挿絵の関係の再検討を基点とする通史的・領域越境的研究

研究課題名（英文）Historical and cross-disciplinary study reexamining of the relationship between modern Japanese literature and frontispieces and illustrations

研究代表者
出口　智之（DEGUCHI, Tomoyuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：１０５８０８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近代日本の文学と口絵・挿絵の関係について、包括的に再考察することであり、明治から昭和戦前期にかけて、様々な作家・画家や新聞・雑誌といった媒体を軸に研究を展開した。作家が絵もまた自作の一部として構想していた明治の制作スタイルが、制作側の意識や媒体の変化によって、画家がみずからテクストを解釈して描くようになり、さらには挿絵画家たちが結集して活動をはじめるようになるまでの変遷を詳細に跡づけた。加えて、石井鶴三に宛てられた400通にのぼる木村荘八の書簡の調査を行い、次年度以降に翻刻発表する準備を整えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本近代文学における口絵・挿絵の性格と位置について、明治期の小説作者たちが口絵・挿絵に深く関わり、絵画にも作者の意図や構想が反映していることを起点として、そうした制作慣習が大正・昭和戦前期にどのように変化し、文学と絵画がともに自立していった変遷を跡づけたものである。上記のような制作慣習自体が、本研究以前にはアカデミアにおいてまったく看過されていたものであり、これによって日本近代文学の捉え方が大きく変わったとともに、挿絵画家たちの社会的・文化史的位置やその果たした役割を正確に見定めることが可能になった。文学研究・美術研究・出版史研究など、他分野にわたる影響力を持った研究であると言える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to comprehensively examine the relationship between modern Japanese literature and frontispieces and illustrations by researching various writers/painters and newspapers/magazines from the Meiji era to the early Showa era. The production style by the Meiji writers, in which the painters made illustrations for literary works by following instructions of the novel writers, was lost during the Taisho and early Showa era due to changes in the consciousness of the painters and journals/newspapers. The painters began to draw the illustrations with their own interpretation of the literary works, and even made organizations of illustration painters.
In addition, more than 400 letters of Sohachi Kimura addressed to Tsuruzo Ishii have been investigated and prepared to reprint in the next fiscal year and beyond.

研究分野：日本近代文学

キーワード：口絵　挿絵　新聞小説　尾崎紅葉　上司小剣　木村荘八　石井鶴三　小村雪岱

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本近代文学と絵画の関係に関する従来の研究は、いくつかの共通する問題を抱えていた。第一に、研究が著名な作家や絵師・画家（以下画人と総称）に集中するか、逆に大略的な流れを記述するにとどまり、個々の作例の通史的位置づけが探られていないこと。第二に、時代や媒体によって異なる作家と画人との関係を正しく見定めず、画人が完成原稿を読んで自由に描くという現代同様の工程を自明の前提としたため、少なからぬ解釈の誤りが生じてしまったことである。この点について、実際には作家が下絵を描いて細かに画人に指示する、江戸戯作以来の制作慣習が残存しており、それは次第に衰えつつも昭和初期まで存続していたことがわかっている。

こうした状況に対し、研究代表者出口と分担者荒井・新井（旧姓：杲）は、既存の前提から刷新すべく研究を展開してきた。出口は、「明治中期における口絵・挿絵の諸問題」（2014）において上記のような制作慣習の残存を訴えて問題提起し、以後明治期の口絵・挿絵から文学のありかたを問い直す研究を行ってきた。荒井は大正期の作家・上司小剣と画家・石井鶴三との関係の考察を軸に、自身を作家と対等な芸術家とみなすようになった画人たちの自負から、明治期とは異なる文学・絵画の関係や、芝居などを含めたメディアミックスの状況を検討してきた。この両者は、科学研究費助成事業「日本近代文学と絵画のジャンル横断的交流に関する総合的研究」（基盤研究Ｃ、～2018 年度）で、すでに連携した研究成果を出していたところであった。

一方、主に昭和戦前期の絵入り新聞小説を対象に、表現研究の角度から考察してきた新井は、自身の科学研究費助成事業「新聞小説と挿絵の相関性解明を基盤とする大正昭和期の文化融合に関する総合的研究」（基盤研究Ｃ、2017～2019 年度）の遂行過程から、出口・荒井との共同研究も試行的に行ってきた。これらの研究により、近代の口絵・挿絵研究は急速に進展しつつあったところではあるが、しかし考察の対象が明治～昭和戦前期と幅広く、また特定の作家・媒体にとどまらない包括的調査・研究の必要があるため、いまだ調査の及んでいない対象が少なくない。

特に、作者の有名・無名にかかわらず、挿絵史上の問題が集約されている作例の考察や、多数の挿絵を有する、いくつかの重要媒体の網羅的調査が完了せずに残されており、また演劇や出版といった隣接事象との関連も考察がはじまったばかりである。

こうした状況を背景に、三者がこれまで連携して行ってきた石井鶴三宛書簡集（信州大学蔵）の共同調査を一つの結節点としつつ、近代文学と口絵・挿絵の関係について、通史的・共時的双方の角度から総合的に再検討すべく、本研究が企図された。

２．研究の目的

本研究は、①近代日本における作家と画工の関係や協働のありかたと、②媒体による口絵・挿絵の位置づけや制作工程の相違を、通史的な視座から把握することを目的とする。

本研究の出発点は、近代作家も画工に下絵等で指示を出していたという、口絵・挿絵理解の姿勢を根本から改めるドラスティックな捉え直しである。また、研究遂行の過程では、有名作者を中心とする従来の属人的な研究から洩れ、申請者たちによる調査もいまだ行き及んでいない作例や媒体も包括的に扱う。こうした時代・ジャンル横断的な見地から、文学と絵画の接続の様相を包括的に解明することによって、細分化された学問領域を超えた大きな枠組による近代文化の把握を実現し、さらにはメディア研究・歴史学・社会学など、周辺の学問領域への接続可能性を探ることが最終的な目的である。

３．研究の方法

本研究は、上述の目的を達成するため、いくつか個別の目標を設定する。まず、単独の研究者が明治～昭和戦前の三代をカバーするのは困難なため、代表者の出口が明治期、分担者の荒井が大正期、おなじく分担者の新井が昭和戦前期とゆるやかな分担を定める。

このうち、出口は近世文化の影響を色濃く残した明治期における作家や画工のありかたを解明し、加えて草創発展期にあった新聞・雑誌等における口絵・挿絵活用の試みの諸相を明らかにする。まずは口絵・挿絵制作を主導した作家の側を軸として、具体的には坪内逍遙・幸田露伴・森鷗外・泉鏡花といった作家たちの絵画への関わり、また挿絵を不要だと主張した饗庭篁村・尾崎紅葉らの位置づけなどを中心に、個別の作例に即して研究を進めてゆく。同時に、『読売新聞』『都の花』といった媒体の調査に進む。この方向においては、特定の有名作家の作品

に限定せず、網羅的な調査によって媒体そのものの方向性を明らかにすることで、明治期における口絵・挿絵の状況の広範な解明を目指す。以上のような調査研究を通じて、新旧の文化が混淆し、複雑な力学が交錯していた明治における多様な方針と戦略、および衝突と葛藤の諸相を究明する。

次に荒井は、大衆を読者として、新聞や雑誌の視覚化がより進んだ大正期における、口絵・挿絵のありかたやその位置づけを明らかにする。この時期には、明治期同様に作家が画人に下絵や文章による指示（絵組と呼ばれる）を与える場合と、画人が原稿を読んで自由に描く場合とが混在するようになった。さらに、作家と画人とを仲介する編集者の役割が大きくなり、編集上の意図がもう一つの力点として浮上してくる。こうした多様化する制作状況と、口絵・挿絵に対する認識や期待される役割の変化を把握し、昭和戦前期の異文化融合へとつながる大正期のメディアミックスの様相を捉えることを目標とする。

具体的には、大正期『大阪毎日／東京日日新聞』を中心的な調査対象と位置づけ、具体的な事例に即して制作の状況を整理する。作家が画人の指示を与える旧来の慣習ではなく、編集上の判断によって制作された絵の作例を幅広くピックアップするとともに、作家や画人自身が発表した文章、さらには関係者の書翰や日記なども併せて検討することで、編集という第三項が加わった制作状況の変化を具体的に解明する。

新井はまず、明治から続く絵入り新聞小説の系譜の一到達点として、昭和戦前期の新聞連載小説の検討を行う。この時期には、画人たちが作家から独立して自由に絵を描くことがすでに一般化しており、小説本文とほぼ対等の位置を獲得した挿絵は、読者の読み方に直接影響を与える存在となった。そこで、明治以来の絵入り新聞小説の系譜を継ぐ大衆文学を取上げ、明治・大正期とは異なる本文と挿絵の相関性・協奏効果を明らかにする。また、舞台装置家としても活躍した木村荘八や小村雪岱の画業に注目する。両者の挿絵には、舞台演出への意識が反映した作例が認められ、こうした例を起点としつつ、挿絵画家たちの活動領域が大きく広がった昭和戦前期の挿絵の位置づけを探る。そのうえで、当時の異文化融合の様態を究明するとともに、多分野で活躍するようになった挿絵画家たちの意識を明治・大正期の画工と比較することで、近代挿絵史を通覧しうる視座の構築を図る。

以上に加え、共同で石井鶴三宛来翰集（信州大学蔵）の調査研究を行う。これは、大正～昭和期に活躍した画家・石井鶴三が保存していた数千点におよぶ未紹介の来翰群で、これまでの研究でも作家の中里介山・上司小剣の書翰をはじめ、相当数を翻刻紹介・論考化した。しかし、その厖大さゆえにいまだ本格的な研究に未着手のものも多く、本研究では新たに存在が確認された上司小剣の書翰、および木村荘八の書翰を扱う。これらは挿絵史の転換期にあたる、大正末～昭和初期の実作者たちの活動を具体的に示す貴重な資料であり、三者がそれぞれの時代・分野に関する知見をもって共同で調査にあたるメリットは大きい。特に、新井の研究対象の一つである木村荘八の書翰は数も多く、既公刊の全集や日記を補う重要な意味を持つ。この共同調査から得られた知見を、各時代・分野の研究に再反映させることで、各研究の有機的結合と、一次資料の裏づけによる研究地盤の強化が図れるはずである。

４．研究成果

まず、明治期を担当した出口は、明治中期における最も有力な文芸誌の一つだった第二期『新小説』について、口絵・挿絵と小説との関係を網羅的に調査し、その制作過程と機能の考察を行った。また、新聞小説の分野で活躍し、自作の挿絵に強いこだわりを持って絵師たちに指示していた尾崎紅葉に注目し、『読売新聞』に掲載された代表作「多情多恨」「金色夜叉」の挿絵の機能、および単行本にまとめる際の絵の変遷についての論考を発表した。ほかに作家研究としては、樋口一葉「十三夜」の挿絵（中江玉桂画）についての研究も進めた。さらに、雑誌『都の花』全 109 冊に掲載された挿絵の全点調査を完了しており、これは 2022 年度中に論文として発表予定である。

先年の科学研究費補助金研究課題（16K02420）から続く、明治時代における口絵・挿絵の機能と文学・美術史・出版史・書誌学・法制史等への領域越境研究の総括として、『画文学への招待―口絵・挿絵から考える明治文化』を刊行し、また日本近代文学館において企画展「明治文学の彩り―口絵・挿絵の世界」（2022 年 1 月 8 日～2 月 26 日）を開いた。会期中に図録は作成せず、会期終了後に展示の様子や解説などもまじえた図書を作成するのが同館の通常の方針で、こちらは 2022 年上半期に出版予定である。

大正期を担当した荒井は、上司小剣「森の家」「花道」「東京」の画組に関する石井鶴三宛て上司小剣書翰を手がかりに、画組からテクストと挿絵の関係を捉え直し、挿絵画家によるテクスト解釈の問題について考察した。また、明治 33 年 10 月から同 36 年 1 月まで大阪で発刊された『小天地』を調査し、表紙・口絵・挿絵等の分析を行った。さらには、大正期『大阪毎日新聞』の紙面と『サンデー毎日』の誌面とを比較し、新聞や週刊誌の視覚表象のありようにつ

いて検討した。

新井（杲）は、邦枝完二「樋口一葉」の小村雪岱挿絵、『福岡日日新聞』紙上に掲載された小村雪岱挿絵、また大佛次郎「霧笛」の木村荘八挿絵などについて、その意義と機能について、テクストとの関連および明治文学再評価との連動という観点から考察した。一方、木村荘八が所属する美術団体春陽会発行『春陽会月報』、さらに「挿絵倶楽部」という団体などについての調査を進め、昭和初期の挿絵を取り巻く様々な環境についての研究を進めた。特に後者の研究では、同倶楽部の維持運営を実際に担っていた版画商・中島重太郎の存在を明らかにし、同時代の挿絵隆盛を支えた影の人物として、その存在意義を通じて確認した。

このほか、昭和初期の新聞各紙における懸賞挿絵という企画に見られる、挿絵需要の高まりに関する調査、雑誌『東陽』に掲載された「挿絵座談会」を手掛かりとした、昭和初期における挿絵の位置を考察した論考などを発表し、昭和戦前期の挿絵の位置づけを解明した。

これに加え、三者が共同で、信州大学図書館に収められている石井鶴三宛木村荘八書翰の調査にあたった。これには協力者として、富永真樹氏（慶應大他非常勤講師）・増野恵子氏（早稲田大他非常勤講師）も招聘した。3 ヶ年の研究期間中、10 回近く行った調査によって、400 通を超える荘八書翰の全貌が明らかになるとともに、翻字も順調に進んでおり、2022 年度以降、次の研究課題の成果として発表できる見通しが立っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 出口智之	４．巻 97巻5号
２．論文標題 尾崎紅葉「多情多恨」の挿絵戦略―自筆の指示画から考える画文学―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『国語と国文学』	６．最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒井真理亜	４．巻 10号
２．論文標題 上司小剣「森の家」「東京」の画組から見えてくること―信州大学所蔵石井鶴三関連資料から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『信州大学附属図書館研究』	６．最初と最後の頁 ページ数未定（印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杲由美	４．巻 89巻7号
２．論文標題 〈一葉〉という表象―邦枝完二「樋口一葉」における雪岱挿絵の意義―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『国語国文』	６．最初と最後の頁 24-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杲由美	４．巻 10号
２．論文標題 春陽会と挿絵―『春陽会雑報』及び石井鶴三宛木村荘八書簡から見えてくるもの―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『信州大学附属図書館研究』	６．最初と最後の頁 ページ数未定（印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杲由美	4．巻 19号
2．論文標題 挿絵画家となる法―同時代の中の挿絵（二）―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『阪大近代文学研究』	6．最初と最後の頁 ページ数未定（印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口智之	4．巻 105号
2．論文標題 第二期『新小説』における文学と絵画―口絵・挿絵の戦略と羈軛―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『比較文学研究』	6．最初と最後の頁 6-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 出口智之	4．巻 55号
2．論文標題 尾崎紅葉「金色夜叉」の挿絵―『読売新聞』における絵入り小説の挑戦―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『湘南文学』	6．最初と最後の頁 139-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西田谷洋・大橋崇行・木村洋・出口智之	4．巻 2号
2．論文標題 シリーズ・近代現代文学研究座談会明治篇　明治から「近代文学」を考える	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『文学+』	6．最初と最後の頁 7-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杲由美	4．巻 18号
2．論文標題 『東陽』所収「挿絵座談会」における諸問題―同時代の中の挿絵（一）―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『阪大近代文学研究』	6．最初と最後の頁 18-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 出口智之	4．巻 71巻4号
2．論文標題 近代文学研究は近代「文学」研究で十分か？―樋口一葉「十三夜」から考える画文学の試み―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杲由美	4．巻 11号
2．論文標題 挿絵倶楽部と中島重太郎―石井鶴三旧蔵資料および書簡による考察―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 信州大学附属図書館研究	6．最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 出口智之
2．発表標題 明治期新聞・雑誌の口絵・挿絵を考える
3．学会等名 第27回HMCオープンセミナー
4．発表年 2020年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 「富士に立つ影」の挿絵をめぐって
３．学会等名 「新聞小説を考える会・2020年度夏季共同研究会　新聞小説の戦前／戦中」
４．発表年 2020年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 『報知新聞』における挿絵――「富士に立つ影」とその周辺
３．学会等名 「新聞小説を考える会・2020年度春季共同研究会　1930年・1940年前後の新聞小説」
４．発表年 2021年

１．発表者名 出口智之
２．発表標題 文学研究と美術研究の死角―明治文学における口絵・挿絵について
３．学会等名 第一回新派旧派研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口智之
２．発表標題 絵画という戦略―明治作家と口絵・挿絵
３．学会等名 日本出版学会関西部会107回（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口智之
２．発表標題 尾崎紅葉「多情多恨」の挿絵―新聞連載と単行本の相違から―
３．学会等名 第7回文学と美術研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口智之
２．発表標題 明治期絵入り新聞小説と単行本の挿絵戦略―尾崎紅葉「多情多恨」に即して―
３．学会等名 東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 邦枝完二「樋口一葉」論―〈一葉〉の描き方―
３．学会等名 樋口一葉研究会第三十二回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 『福岡日日新聞』と小村雪岱―「藤三行状記」の周辺―
３．学会等名 共同研究会・新聞小説を多角的に考える
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口智之
２．発表標題 近代文学研究は近代「文学」研究で十分か？―画文学の試み―
３．学会等名 日本文学協会第76回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 大佛次郎と木村荘八―「霧笛」の挿絵を中心に
３．学会等名 新聞小説を考える会・2021年度夏季共同研究会「新聞小説作家の諸相」
４．発表年 2021年

１．発表者名 杲由美
２．発表標題 大佛次郎「霧笛」にかかる諸問題
３．学会等名 新聞小説を考える会・春季共同研究会「新聞小説の多角的考察」
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

１．著者名 斎藤理生・杲由美編	４．発行年 2020年
２．出版社 パブリック・ブレイン	５．総ページ数 118
３．書名 新聞小説を考える―昭和戦前期・戦中期を中心に	

１．著者名 出口智之	４．発行年 2021年
２．出版社 Humanities Center Booklet Vol.12	５．総ページ数 135
３．書名 画文学への招待―口絵・挿絵から考える明治文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「明治文学の彩り―口絵・挿絵の世界」、日本近代文学館企画展
https://www.bungakukan.or.jp/cat-exhibition/13436/
2022年1月8日(土)～2月26日(土)まで、日本近代文学館にて「明治文学の彩り―口絵・挿絵の世界」展を実施。本研究課題代表者の出口が編集。会期中に図録は作成せず、会期終了後に展示の様子や解説などもまじえた図書を作成するのが同館の通常の方針で、2022年上半期に出版予定である。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	荒井　真理亜 (ARAI Maria) (90612424)	相愛大学・人文学部・准教授 (34421)	
研究分担者	新井　由美 (ARAI Yumi) (40756722)	大阪大学・文学研究科・招へい研究員 (14401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関